



県指定文化財「人面付壺型土器」
(那珂市梅後遺跡出土)



錦絵「稲妻雷五郎土俵入」
稲敷市立民俗資料館蔵

目次

- ① 特別展Ⅰ「縄文のムラ 弥生の村」
- ② テーマ展 資料紹介
- ③ 史料紹介展「鹿島神宮文書」
- ④ 所蔵資料紹介「昭和恐慌前後の茨城県」
- ⑤ 所蔵史料紹介「今川義元感状」
- ⑥ 写真に見る17年度の活動状況・インフォメーション

平成 18 年度特別展 I 縄文のムラ 弥生の村 —いにしえ人の暮らしと文化—

平成 18 年 9 月 30 日（土）～平成 18 年 11 月 19 日（日）

およそ 1 万 2 千年前に始まる縄文時代とそれに続く弥生時代は、1 万年以上もの長い間続きました。これらの時代の遺跡から出土するさまざまな資料は、縄文人や弥生人が私たちに残したタイムカプセルであるといえます。私たちはそれらの資料から、当時の生活の様子を知ることができるばかりでなく、当時の人々の息吹きを感じ取ることができるのです。

本展覧会では、県内及び日本各地の代表的な出土資料から、いにしえに生きた人々の生活を紹介するとともに、縄文・弥生時代の人々の豊かな感性に触れていただこうとするものです。

縄文時代は土器の出現によって始まります。土器の出現は、人々の生活を画期的に変化させました。そして、定住した集落、ムラが誕生しました。これにともなって、人々は生活に必要な多くの道具を自然の素材を巧みに利用するとともに高度な技術で作りだすようになります。特に土器は、地域や時期により多様な造形のものが作られ、そこからは縄文人の豊かな感性や、たくましい生命力を感じ取ることができるのです。



新潟県十日町市の笹山遺跡から出土した縄文時代中期の土器は、燃え上がる炎のイメージから「火焔型土器」とも呼ばれ、豪華な装飾と巧みなつくりから国宝に指定されています。

国宝火焔型土器 十日町市蔵

弥生時代になると、本格的な米づくりが始まり、青銅製や鉄製の道具・武器が作られます。それらにともない、人々の暮らしも大きく変化し、弥生の村が誕生します。これら集落には縄文時代のムラとはちがい、集落を守るために環濠をめぐらした村や、古代の都市国家とも言える大規模な村も出現します。また、弥生時代の遺跡から出土する様々な資料からは、弥生人の暮らしぶりや、弥生社会が急速に変化していく様子を窺うことができます。



兵庫県神戸市郊外の桜ヶ丘で発見された銅鐸には、様々な絵画が描かれています。中でも5号銅鐸には臼と杵を使って脱穀をしている様子が描かれていて、当時の生活の一端を見ることができる貴重な資料です。

国宝桜ヶ丘5号銅鐸 神戸市立博物館蔵

本県には、縄文・弥生時代の遺跡が数多く存在し、明治12年(1879)に陸平貝塚が発掘調査されて以来、考古学的調査による資料が蓄積され続けてきました。特に近年は大規模な発掘調査の実施により良好な資料が数多く得られ、地域の縄文・弥生時代は一層明らかになりつつあります。



常陸大宮市の小野天神前遺跡では、再葬墓とよばれる墓坑から土器の棺が多数出土し、そのなかに人面の付いた壺が見つかりました。弥生時代の埋葬の様子を知る手がかりとなります。

県指定文化財 人面付土器 本館蔵

関連行事講演会 平成18年10月22日(日) 講師 國學院大學短期大学 小林 青樹 縄

文太鼓演奏会 平成18年10月7日(土) 美浦村立安中小学校

その他、体験講座としてアンギン織りや勾玉作りなどを予定しています。

テーマ展 資料紹介

テーマ展 7/16～8/27

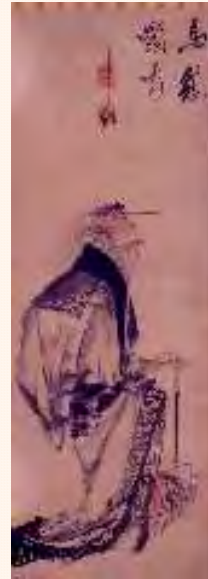


「水戸東照宮の歴史」
総毛引紅糸威胴丸具足
水戸東照宮蔵



「郷土のやきもの」
七面焼窯場図切立花瓶 個人蔵

テーマ展 9/1～9/22



「絵画の中の人物」
林十江筆「花魁・遣手婆図」

テーマ展 11/2～1/4



「祈りの風景」
狩野晏川 近世職人尽絵詞 下巻
東京都江戸東京博物館 蔵



「茨城の古墳時代」
伝舟塚古墳出土双龍環頭大刀



「密教の世界」
両界曼荼羅のうち
金剛界曼荼羅

史料紹介展 鹿島神宮文書

会 期 平成18年10月21日(土)
~ 11月13日(月)

1 鹿島神宮と武家

藤原摂関家と結びついて発展した鹿島社は、中世になると武家の精神的な拠り所となります。治承4年(1180)、源頼朝は常陸国府を掌握した後、金砂合戦で佐竹氏を破り、常陸国をほぼ支配下におきました。「武家護持の神」として厚く鹿島社を信仰していた頼朝は、大窪郷(日立市)や橘郷(小美玉市、行方市)などを同社に寄進しました。古代より国衙との結びつきも強く常陸国一の宮としての権威を誇ってきた鹿島社を、東国における信仰の中心として存続させるための保護政策でした。

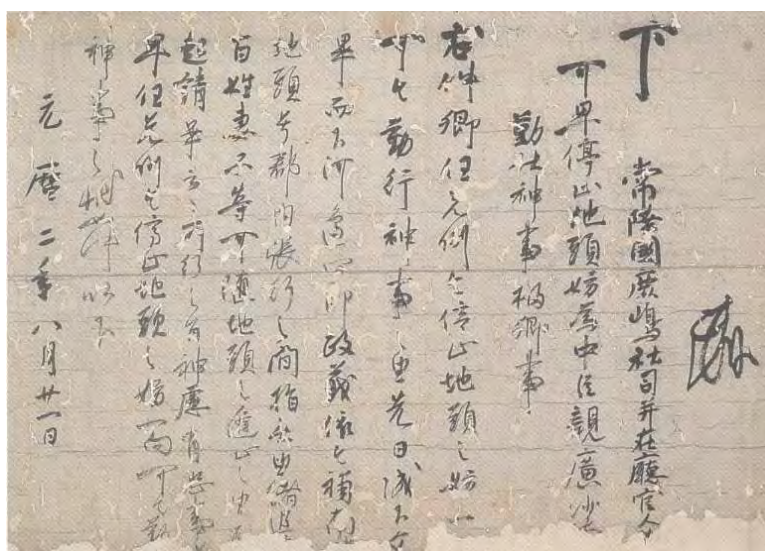
鹿島神宮の祭神である武甕槌神は武神として中世を通じて多くの武士の尊崇を集めました。そのため、鹿島神宮文書には源頼朝下文、足利尊氏御教書をはじめ、関東下知状などの武家関係文書が豊富です。鎌倉幕府の正史ともいべき「吾妻鏡」編纂にあたって、同文書が利用されたといわれています。

2 鹿島神宮文書

今回の史料紹介展では鹿島神宮(鹿嶋市)が所蔵する18巻の^{かんす}卷子(いわゆる巻物)に収められた約250点の文書の中から中世文書を中心に紹介します。これらは、茨城県のみならず関東を代表する文書です。

鹿島神宮文書は、現在、全体に損傷がみられ、原本は非公開となっています。この史料紹介展では、文書の写真、解説をパネル展示します。

次に、展示史料の中から2点紹介します。



「源頼朝下文」鹿島神宮蔵

この文書は元暦2年(文治元, 1185)8月21日に源頼朝が出した「源頼朝^{くだしづみ}下文」です。書き出しが「下す」ではじまるので「下文」といいます。頼朝の署名はありませんが、文書の袖(文書の右側部分)に頼朝の花押(サイン)がみえます。頼朝の花押は、「頼」の偏「束」と「朝」の旁「月」を左右に合せて作った字「朝」をくずしてデザイン化しています。

常陸国南郡（石岡市，小美玉市，茨城町などを含む領域）の惣地頭職であった下河辺政義は橘郷の支配をめぐって鹿島社大禰宜中臣親広と争います。下河辺政義は『吾妻鏡』に「戦場に臨みては軍忠を竭し，殿中において労功を積む，よって御気色殊に快然たり」とあり，戦場や殿中での功績が頼朝から高く評価されていました。

元暦2年8月，頼朝の御前で裁決が行われました。この下文はこの時の「判決文」です。政義の乱暴を停止することを命じる鹿島社（大禰宜中臣親広）勝訴の判決でした。御前で十分な反論をしなかった政義に，頼朝がその理由を問いただしたところ「鹿島社は武士を守護する神である。これを恐れおののく気持ちを持っているので反論ができなかった」と答えました。戦場では武勇の士とされた政義でしたが，東国武士の精神的支柱であった鹿島社が相手では戦意も喪失してしまっただけです。



「足利尊氏御教書」鹿島神宮蔵

この文書は，観応3年（文和元，1352）9月2日付の「足利尊氏御教書」です。「状如件」の文言で書止め，日付の下に足利尊氏が花押を記しています。このような様式の文書を御判御教書といいます。尊氏の花押は，足利氏一族が署する花押の祖型となりました。

中世の鹿島社領は，神郡と呼ばれた鹿島郡を中心に行方郡や国府が所在する南郡など常陸国南部に集中していました。文書に見える倉河郷，小牧郷は行方郡内の所領ですが，鎌倉時代末期には地頭である常陸平氏の一族行方氏などによって下地濫妨・神用物抑留などにさらされていました。鹿島社は，鎌倉幕府や雑訴決断所へ地頭の非法停止を訴えましたが，地頭の行為は止みませんでした。

観応3年，鹿島社の訴えを受けた足利尊氏は，倉河郷地頭倉河三郎太郎，小牧郷外小牧村地頭小牧弥十郎の所領を没収し，下河辺左衛門蔵人行景に預けることを命じました。しかし，尊氏の命を受けた，武田高信，宍戸朝世が現地に赴きましたが，在地勢力の抵抗にあって鹿島社への所領の引き渡しができませんでした。

この争いで鹿島社への年貢は滞り，鹿島社が大きな損害を蒙ったことは言うまでもありません。鹿島社は重大な関心をもって，相論のゆくえを見守っていたのです。

（首席研究員 宮内教男）

所蔵資料紹介 「昭和恐慌前後の茨城県」

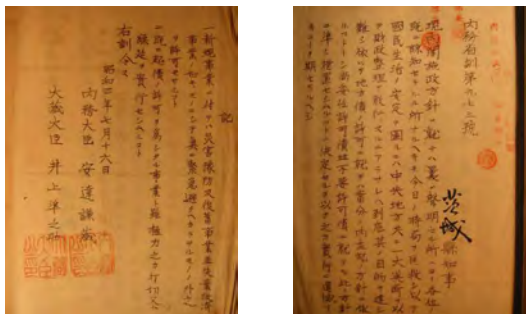
バブル崩壊後、低迷の続いた日本経済もようやく回復の兆しをみせ、デフレ（デフレーション）からの脱出が話題となっています。インターネット経由の株式売買を行う個人投資家も増加し、経済に関心を持たれた方々も多いのではないのでしょうか。

さて、日本の歴史上、デフレ期といえは、まず昭和恐慌期をあげることができます。文書館機能を有する当館でも利用件数の多い行政文書の一つに昭和初期の失業対策事業に関わる文書があります。そこで、当館に所蔵されている資料から、当時の茨城県の様子をご紹介します。

「例規綴」(行 29-1)

日本では第一次世界大戦後から慢性的な不況に悩んできました。昭和2年(1927)には関東大震災による損失と相まって、銀行が相次いで休業する、いわゆる金融恐慌が起こりました。平時では例のないモラトリアムが施行されたのもこのときです。不況からの脱出をはかるため、昭和4年(1929)に2度目の大蔵大臣に就任した井上準之助は緊縮財政による物価引き下げ、金解禁政策による金本位制への回帰をめざし、この政策は井上財政と称されました。

内務省から茨城県知事に宛てられた文書によれば、「今日ノ時局ヲ匡救」するため「中央地方共二大英断」をもって、新規事業及び起債の中止といった財政再建の方針を示しています。井上財政は膨張した日本経済への一つの立て直し方針を提示したものといえますが、国際環境の変動で挫折し、さらに井上は血盟団事件により昭和7年(1932)2月に暗殺されました。



「例規綴」(行 29-1 一部)

～失業対策事業関係資料から～

「失業救済農山漁村資金貸付規程並例規関係綴」(行 30-12)

昭和4年(1929)10月、ニューヨークのウォール街における株式暴落にはじまる世界恐慌は、以後4年間にわたって資本主義諸国をまきこみ、未曾有の大恐慌となりました。経済の不況は人々の生活を直撃し、輸出も激減し、なかでも生糸は大きな打撃を受けました。繭・米・麦などの農産物をはじめ、国内の諸物価は暴落しました。町には失業者があふれ、村では破産する農家が増えました。

大蔵省預金部では、耕地拡張改良・山林開発・蚕桑改良・水産諸施設・畜産諸施設・副業及農業共同施設の6種を、農山漁村臨時対策資金として低利で貸付けて、失業者を救済しようしました。しかし、昭和6年、7年と凶作が続き、8年は皮肉にも豊作による農産物価格の下落、9年は凶作と農村の経済は好転しませんでした。また、7年より実施された農山漁村経済更生計画は、農家の自力更生が叫ばれ、勤勉、儉約をモットーとする精神主義が中心でした。



「失業救済農山漁村資金貸付規程並例規関係綴」(行 30-12)

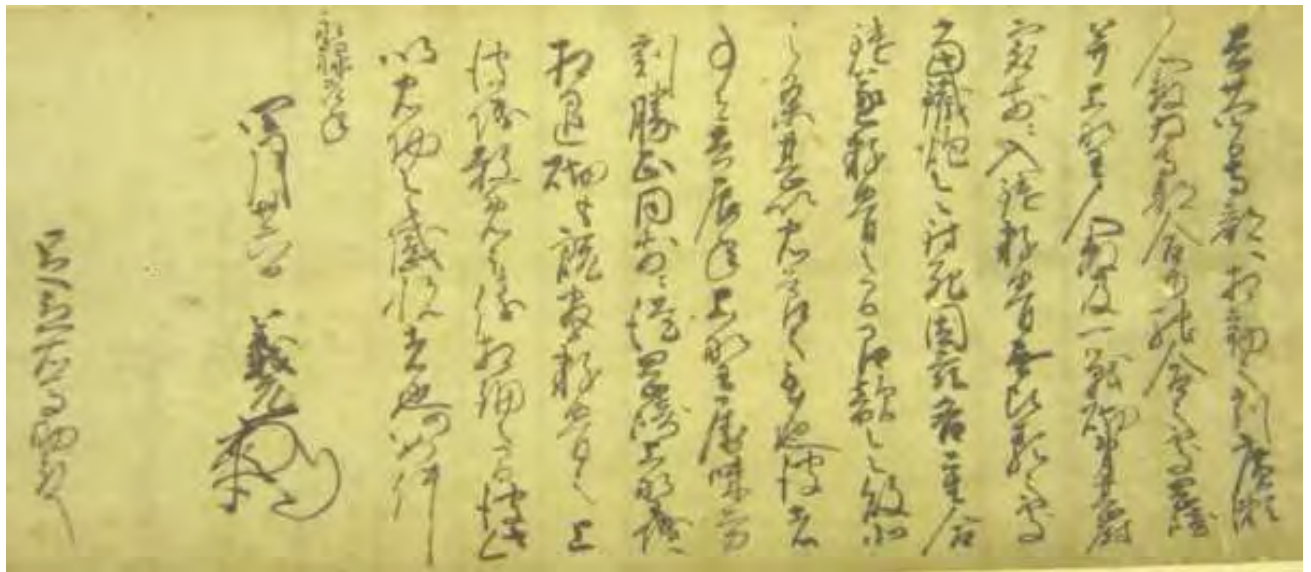
前述のとおり当館は文書館機能を有しておりますので、現在約1万7,000点の行政文書、さらには行政刊行物や議会刊行物など合わせて約5万5,000点を所蔵し、公開しています。資料は当館にて閲覧できますので、実物を手にして、当時に想いを馳せながら歴史を感じてみるのはいかがでしょうか。また資料検索システムがリニューアルし、よりいっそう便利になりましたのでご利用下さい。

(<http://www2.rekishikan.museum.ibk.edu.ed>)

(主任研究員 富田 任)

所蔵史料紹介

今川義元感状



「今川義元感状」(個人蔵)

(読み)

去廿四日寺部へ相動之刻、広瀬
人数為寺部合力馳合之處、岡崎
并上野人数及一戦砌、弟甚尉
最前二入鎧、粉骨無比類之處、
當鐵炮令討死、因茲各重合
鎧、遂粉骨之間、即敵令敗北
之条、甚以忠節之至也、彼者
事者、去辰年上野属味方
刻、勝正同前二從岡崎上野城へ
相退砌も、既盡粉骨之上、
彼城赦免之儀相調之間、彼比
以忠功令感悦者也、仍如件、

永禄元年

四月廿六日 義元(花押)

足立右馬助殿

本文書は、駿河、遠江の戦国大名で著名な今川義元が発給した文書です。平成16年11月に日立市の綿引正純氏から当館史料部に寄託されました。「静岡県史資料編7中世三」には採録されておらず、新出史料です。宛先の足立右馬助の子孫は近世には幕臣(御家人、二百俵取)となり、「寛政重修諸家譜」の足立氏の頃には、「今川義元より其忠功を賞して兄(右馬助)がもとに感状を与へらる」と、本文書の存在を記しています。寛政年間までは同家に保存されていたことが分かります。しかし以後同家から流失したようで、明治期に入って東京神田の古美術商に収集され、昭和38年頃に綿引家に移りました。本館に寄託されることで、日の目を見た文書といえます。

本文書の料紙は楮紙で、現状は横切紙で掛軸装されています。文書の法量は縦 16.5 cm、横 39.7 cmを測ります。花押の形状は同時期の義元花押と同一で、本文書は原本と見做してよいものです。

戦国時代の新出文書、それも大名の発給文書ですから新しい事実を語る可能性が高いのですが、内容を詳細に検討すると、特に注目すべき史実が浮かび上がってきます。

本文書は永禄元年（1558）4月、今川義元が、当時人質にしていた松平元康（後の徳川家康）の家臣足立右馬助に与えた感状です。特に同年2月からの三河寺部城（豊田市寺部）の合戦や、2年前の弘治2年（1556）の同上野城（豊田市上野町藪間）帰属問題での、右馬助の弟甚尉の活躍、そして討死を賞しています。

本文書で何よりも注目されることは、寺部城合戦について記されていることです。寺部城合戦とは、今川家の人質であった徳川家康の初陣として巷間によく知られている合戦です。当時の三河は今川家の支配下にありましたが、隣国尾張の大名織田信長と今川家の対立の焦地でもありました。寺部城合戦は2年後の桶狭間の合戦の前哨戦の一つともいえるものです。この合戦については、大久保忠教の「三河物語」や松平家忠の「家忠日記増補追加」など後日の記録に、同年2月5日に岡崎に戻った家康が、家臣の岡崎衆を率いて、信長方に寝返った寺部城主鈴木日向守重辰を攻め、見事初陣を飾った経緯が記されています。しかしこの合戦に関わる文書は、「譜牒余録」巻四十二に写された松平次郎右衛門宛て今川義元感状写以外には、その存在は知られていませんでした。その点で、本文書が日の目を見たことは貴重なのです。

本文書からはまず、寺部城合戦の終期が判明します。「三河物語」などでは記されず、「譜牒余録」の今川義元感状写では、城主鈴木重辰の再入城など巻き返しがあり、合戦は4月まで継続していたことが判明するのみだったのですが、4月26日付けの本文書では、足立甚尉が討死したことを「去二十四日」とし、「即敵令敗北」しめる結果となったと記しています。ここから寺部城合戦は4月末に今川方（家康勢）の勝利で決着した事実が判明します。また織田信長方に付く「広瀬人数」（広瀬城主三宅高潜勢）が鈴木重辰方に加勢したのに対し、家康方では直臣勢の「岡崎人数」の他、「上野人数」（上野城主酒井忠尚の勢力）が加勢した事実も確認できます。

この他、2年前の上野城の帰属問題も新事実です。紙幅の関係から寺部城合戦の様相のみを示しましたが、新しい史料の発見で、このように歴史の新事実が明らかになってくるのです。

歴史館史料部では、このような貴重な史料を含め約17万点の歴史資料を公開しています。

（首席研究員 内山俊身）

写真に見る17年度の活動状況



「祭り万華鏡」(講演会)



(歴史館コンサート)



(民家解説)



(歴史教室)



(親子歴史教室)



(歴史館まつり)

お知らせ

小・中・高校生の入館が無料になりました。

ホームページをリニューアルしました。

学校関係学習支援、講師派遣事業などの充実を図りました。

詳しくはホームページを参照してください。

ボランティアを募集しています。

講堂、茶室の貸し出し時間を延長しました。am 8:30 ~ pm5:30

歴史教室案内

第2回 9月2日(土)「昭和恐慌期の茨城県 - 行政文書に見る失業対策事業 - 」

第3回 12月2日(土)「松平頼重の下館入封について - 国替え時の地域と民衆 - 」

第4回 平成19年1月20日(土)「明治農政と茨城県農会」

* 各日14時 ~ 聴講無料 申込み不要

歴史館まつり案内 8月19日(土) 8月20日(日)

19日 9:30 ~ 17:30 歴史館シンポジウム

「中世東国における内海世界」霞ヶ浦周辺の新しい歴史像を描く

20日 10:00 ~ 16:00 祭りイベント多種

歴史館コンサート案内

第2回平成18年 9月15日(金) 14:00から

第3回平成18年11月17日(金) 14:00から